私の研究課題

当研究所に入社してからこれまで私は一見全く異なる二つの分野の研究を行ってきた。一つは日本農業の現状分析であり、もう一つは南アジア（インドなど）を中心とする発展途上国の農業・農村研究である。

前者においては、稲作を中心とする土地利用型農業の現状と将来展望、そして中山間地域農業や環境保全型農業をテーマに研究を行っている。都会に住む人の少なからずがそうであるように、私も農家の出身である。農家の後を継いだ父が高度経済成長の中で職を得て兼業農家となり、今、子ども達（私達兄弟）は両親を故郷に残して都会でサラリーマン生活をしている。一方、かつて田んぼの畦にまで桑や大豆が植えられていた農地は、両親が自家用米とわずかの野菜を作る以外、現在ほとんどが耕作を放棄されて荒れ野原となっている。私の存在は、中山間地域における農家の典型的な発展（衰退？）を象徴しているわけである。その一方で、「何で好きでもない都会に自分は住まなければならないのか」と自問する。経済的にはそこそこ豊かなはずなのに、なぜ自分が幸福だとは感じられないのだろうか。どうしたら緑豊かな農村（それは生れ故郷である必要はない）に帰り、自分の存在を実感できるような生き方ができるだろうか、と思う。都会の多くの人は、私と同じように感じながら生活しているのではないだろうか。こうした普通の人の「夢」はどうしたら実現するのか。日本社会は、農業・農村はどう変わらなければならないのか。これが日本農業・農村に関する私の研究の根本的視点である。

私のもう一つの研究テーマは、途上国の農村発展はいかにしたら達成できるか、である。私が幼かった頃の日本の農村には、まだ貧困というものがあった。だが、南アジアなど途上国の農村には（都会でもそうだが）、それをはるかに超える貧困が今でも存在する。それを知ってしまった者として、どう生きていったらいいのだろうか。私が持つ唯一の武器である「研究」を、どう役立てられるのだろうか。今のところ、マイクロファイナンスや信用農協など貧困者にも届く農村金融システムについて研究し、途上国の貧困解決に役立つ金融システムづくりに僅かなりとも貢献することが私のできることではないかと思っている。日本の農協発展の歴史は、それに大きな示唆を与えてくれる。

ところで、実は長い間、一見全く異なるこの二つのテーマがどう関係しあうのか、自分にもはっきりしなかった。ようやく最近になって、これらのテーマは、その上にもう一つのテーマを設けることによって架橋され、より大きな一つのテーマに統合されるものであることがおぼろげながら分かってきた。それは、いかにして国境のない新しい世界を実現するか、そして誰もが自分の望む生き方を追求することができる社会、しかも環境制約や資源の有限性を持つ現実の世界の中でも永続できる社会をどう作っていくか、ということである。その来るべき新しい社会において、「農の復権」は、重要なキーワードになるという確信が私にはある。今後は、この第３のテーマを柱の一つとして調査・研究を続けていきたいと思っている。

（須田敏彦）